

(4) シクラメン

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
軟腐病 (細菌)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。 ③灌水は過湿にならないように注意する。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 【参考事項】 梅雨明け前後から8月にかけて発生する。 灌水に使用する水にも注意が必要である。 宿主範囲(ナス科、アブラナ科、キク科、ユリ科、セリ科など)は極めて広い。
葉腐細菌病 (細菌)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②移植・灌水などの管理作業で植物体に傷を付けないように注意する。 ③高温・過乾・過湿・多肥にならないように注意する。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 ⑤被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 【参考事項】 夏季に発生が多く、この時の植替え作業は本病を誘発する。 病原菌は土壌伝染及び種子伝染、二次的には灌水による飛沫や接触により伝染する。
萎凋病 (<i>Fusarium</i>)	①用土は蒸気消毒などにより無病のものを使用する。 ②被害株は発見しだい鉢とともに温室外へ持ち出し、適切に処分する。 ③高温多湿を避ける。 ④古鉢や棚は使用前に必ず消毒する。 【参考事項】 本病により腐敗・乾固した株には、白色綿毛状のカビが見られる。この株を放置すると、ここから灌水の水しぶきや風などにより分生子が飛散し、二次伝染をおこす。 鉢上げ時にできる根の傷口から感染が起こりやすい。
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①通風・換気などにより施設内の湿度を下げる。 ②枯葉や咲き終わった花をこまめに除去する。 【参考事項】 梅雨時期や秋の施設を密閉し始めた時期(多湿、結露が発生しやすい)に発生する。 軟弱徒長している場合に多発しやすい。 宿主範囲が広く、空気伝染するため、他の罹病作物が伝染源となることもある。
炭疽病 (<i>Colletotrichum</i>)	①発病株は早期に除去し、適切に処分する。葉かきなどにより除去された枯葉は、直ちに施設外に持ち出し、適切に処分する。 ②高温、多湿にならないよう盛夏期の遮光や換気を行う。 ③地上部への灌水の水はねにより感染するので、発生施設では底面灌水に切りかえる。 【参考事項】 発病適温は23～28℃で多湿時に多発する。 農薬の薬効が現れると病斑が乾固して病勢が停止するが、高温多湿条件になると再び発病するので、病斑部や病株は除去する。
ミカンキイロ アザミウマ	①施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットや0.8mm目合いの赤色系ネットを張り、侵入を防止する。 ②不必要な花及びほ場内の雑草は本種の発生源となるので、速やかに処分する。 ③周辺の雑草にも寄生するので、除草する。 【参考事項】 生育の早い花や施設開口部付近の花での被害に注意する。 可能ならば、夏期に一度施設内の植物(雑草を含む)を除去し、施設を2週間程度密閉し、害虫を蒸し殺すことも効果的である。
ハスモンヨトウ	①施設の開口部に目合い4mm程度の防虫ネットを張り、侵入を防ぐ。 ②孵化直後の幼虫は集団で加害しているので、捕殺の効果が高い。 【参考事項】 多発するのは7～11月頃である。 若齢幼虫は、葉裏から集団で表皮を残して食害するため、白い食害部が目立つ。 中老齢幼虫は株間にもぐり、若いつぼみや葉を食害する。
シクラメンホ コリダニ	①施設間の株移動には注意する。また、セントポーリア、デルフィニウムなどを同じ施設に持ち込まない。 ②施設近隣の作物(イチゴ、ピーマン、トウガラシなど)から移らないように注意する。 ③施設周辺の除草を行う。 ④被害株をほ場外に持ち出し、適切に処分する。 【参考事項】 他の寄生するホコリダニ類として、チャノホコリダニが確認されている。 シクラメンホコリダニによる被害程度は、チャノホコリダニによる寄生に比べて大きい。 初発時の肉眼による発見は困難で、春の幼苗期や9～10月の開花始めに、花や新葉の奇形、変色で気づくことが多い。